

保育の質向上を目指した園内研究
—園のリーダーシップと研究者との協働—

In-house research aimed at improving of early child care and education
— Early child care and education facilities leadership
and collaboration with researcher —

工 藤 ゆかり 加 藤 貴 子
KUDO Yukari KATO Atsuko

北翔大学教育文化学部研究紀要
第5号 2020

保育の質向上を目指した園内研究

—園のリーダーシップと研究者との協働—

In-house research aimed at improving of early child care and education

— Early child care and education facilities leadership

and collaboration with researcher —

工 藤 ゆかり

KUDO

Yukari

加 藤 貴子¹⁾

KATO

Atsuko

要旨

幼児教育・保育の無償化が始まり、保育の質に関する関心が高まっている。そのような中、乳児保育が増大し、さらに保育の長時間化も進み、乳幼児の幼児教育・保育時間が増加している。全ての子どもが良質な幼児教育・保育を受けることが、子ども達の幸福につながるという。そこで、園と研究者が協働して、保育のプロセスの質向上を目指し、保育者一人一人が研究のできる実践者に、保育に関する専門家が実践のわかる研究者として保育現場を支えることに取り組んだ。研究対象園は、園長がリーダーシップをとりながらも、保育者がそれぞれ自分の得意な分野で力を発揮するという分散型リーダーシップを実践している園であった。研究者が保育を参観しながら動画を撮影し、保育者と共に動画を見て振り返り、保育の行為の意味を確認したり、問題提起をしたりすることを通して、保育者は自分の保育を客観的に評価した。複雑で多様で刻一刻と変化する保育を日々こなすことはできていたが、自分の援助の意図や子どもに与える影響について考えが不足していることに気付き、保育を改善しようという意識をもった。外部の保育に関する専門家である研究者がかかわることで緊張感をもって保育に取り組んだこと、研究者に一方的に指摘されるのではなく保育者と研究者で協議することを通してより良い保育内容、保育方法を共に導き出したことが保育を改善しようという意識を生み出し、保育の質向上につながった。幼児教育・保育施設によるリーダーシップはもちろんのことであるが、保育の現状を理解した研究者が積極的に保育現場に関わり保育者と共に協働することで、保育の質向上を図ることが出来ることが本研究から分かった。

キーワード：保育の質向上，園のリーダーシップ，研究者との協働

1) 札幌市立あつべつきた幼稚園

I 問題と目的

幼児教育・保育を無償とする「子ども・子育て支援法改正案」が成立し、令和元年10月から3歳以上の子どもの幼児教育・保育が無償となり、3歳未満の保育は住民税非課税世帯を対象に無償となった。この改正案検討の際に、認可外保育施設の質について議論されたり、無償化を機に保育需要が伸びることで質の低下が懸念されたりなど、保育の質について改めて問われた。

また、厚生労働省の調査（2017）¹⁾によると乳児保育が増大し、1・2歳児の保育利用割合は2011年度は29.5%であったが、2018年度は45.7%と7年間で約1.5倍利用率が上昇した。さらに、ベネッセ教育総合研究所の調査（2019）²⁾によると保育の長時間化が進み、幼稚園・保育所どちらの施設も2018年度は2013年度と比較すると国公立幼稚園・公営保育所で30分程度、私立幼稚園・私営保育所で10分程度平均開所時間が長くなっている。このように、乳幼児が家庭で過ごす時間が減少し、幼児教育・保育を受ける時間が増加している。全ての子どもが良質な幼児教育・保育を受けることが、子どもの生涯の幸福につながるという観点から、保育の質保証とさらなる質向上が求められている。

保育の質向上を考えるにあたり、保育の質とは何かを確認する。大宮（2006）³⁾は保育の質を捉える3つの側面として、①プロセスの質（保育実践そのもの、保育者と子どもとの関係、環境の構成等）、②構造の質（保育者と子どもの比率、クラスの数、保育者の資格）、③労働環境の質（給与、やりがい）を挙げている。ここでは、プロセスの質に焦点をあてて考えていくこととする。

筆者（工藤）は、北海道教育庁の幼児教育相談員として園からの依頼を受け幼児教育施設を訪問し、公開保育に係る助言、園内研修の講師、保育に係る個別の相談、園経営等について管理職からの相談などを受ける等を行ってきた。また、札幌市立幼稚園3園から依頼を受け、研究アドバイザーとして保育を参観した上で園内研究に参加し、園長はじめ保育者と共に保育について研究協議してきた。いずれの園も、保育の質向上のために園内の職員が一丸となり、園外の専門家の助言等を取り入れながら熱心に取り組んでいた。

保育の質向上には、保育者一人一人が研究のできる実践者になることが望まれる。同時に、保育に関する専門家が実践のわかる研究者として保育現場を支えることが必要であると考えられる。両者が協働することにより、実践者は新たな視点で自分たちの保育を考えることが出来るようになり、研究者は保育現場の現状を理解した上で今後の保育の発展に寄与する研究ができるようになる。本研究は、保育の質向上を目指した園内での取組及び研究者との協働の在り方と効果について明らかにすることを目的として取り組む。

Ⅱ 方法

1 対象

筆者(工藤)が研究アドバイザーとして依頼を受けた札幌市立あつべつきた幼稚園の園長(筆者加藤)及び保育者と共に取り組むこととする。

2 方法

6月3日, 8月23日, 9月24日, 9月27日と, 研究者が園を訪問し保育を参観しながら動画を撮影した。その保育の場面の動画を見ながら, 保育者に保育の行為の意味を確認したり, 問題提起をしたり, 他の保育内容や保育方法がないかを共に考えたりした。その際, 園の教育方針や研究テーマと結び付けながら考えるようにした。研究者と園長はじめ全保育者で研究協議したことは研究の取組に反映し, 日々の保育実践に活かしていくよう努めた。

Ⅲ 結果

1 札幌市立あつべつきた幼稚園の概要

(1) 幼稚園の概要

札幌市の東端に造成された森林公園パークタウンの中に位置し, 教育に関心の高い地域である。近年, 園児数の減少が進み, 令和元年度の在園児は, 3歳児18名, 4歳児23名, 5歳児16名の57名である。職員は, 園長1名, 主任1名, 幼児教育支援員1名, 養護教諭1名, 3歳児担任・担当2名, 4歳児担任・担当2名, 5歳児担任・担当2名, 事務補助員1名, 計11名の職員がいる。

札幌市立幼稚園は, 研究実践園としての機能を有している。幼児教育に関する研究に取り組む, 区内の幼稚園・認定こども園・保育所・小学校等に研究発信, これらの施設の連携・接続, 地域の子どもの教育相談などを実施している。

(2) 教育活動の特色及び令和元年度の研究

遊びを通して様々なことを学んでいけるように, 「主体的・対話的で深い学びが生まれる保育の創造」を目標に, 日々の教育活動を行っている。

令和元年度は「幼児期にふさわしい生活の在り方を求めて-豊かな人とのかかわりの中で自分の思い, やりたいことを実現させる幼児-」を主題として研究に取り組む。「主体的・対話的で深い学びが生まれるための教師の援助や環境の構成」を視点とし, 主体的な学び及び対話的な学びの事例を検討し, これらの取組及び成果を保護者へ効果的に発信する。

9月27日に北海道私立幼稚園教育研究大会札幌ブロック大会兼札幌市私立幼稚園教育研究大会での公開保育および研究発表があり, 日頃の教育活動や研究の取組を多くの人に発信できる

機会と捉え、研究の充実を図り保育の質向上に取り組む。

(3) 園のリーダーシップ

筆者（加藤）は、園長になった際に、小林・民秋（2009）⁴⁾の「園長の責務と専門性の研究」を参考に、①保育観、保育方針を示す、②人材育成、③職場のコミュニケーション、④保護者対応、⑤地域や他の機関との連携、⑥地域育児支援、⑦保育者としての園長の役割などについて意識して責務を果たすよう努めてきた。

さらに、多様化する特別な教育的支援を必要とする子どもへの対応、預かり保育を導入してローテーション勤務になったことなどから、教員の多忙感が増しているという課題がある現状で、これまで以上に保育者がチームとなって子どもの保育にあたることが求められた。これらのことをきっかけに、園長がリーダーシップをとり、教育方針の共通理解や職員間のコミュニケーションなどを推進していくべきであることを再認識した。しかし、求められている質の高い保育の実践には、教員の資質の更なる向上が不可欠であり、それは園長のリーダーシップだけで実現するものではなく、教員の主体性をいかに発揮させるかが園長としてのマネジメントの課題であると考えた。

本園には経験年数が豊富なミドルリーダー世代の教員が多数いる。そこで、園長をサポートして保育者をまとめる役割を果たす主任、研究活動の中心となる研究部長、特別な教育的支援を必要とする子どもの指導について中心的に推進する特別支援教育コーディネーター、地域や他の機関との連携や地域教育相談を中心的に推進する幼児教育支援員という役割を担う保育者が園運営を支え、ミドルリーダーとしての役割や園の課題解決に向け、力を発揮できるようにしている。このように、分散型のリーダーシップ（秋田、2017）⁵⁾をとることでミドルリーダーが園内の次の人材を育て自分自身の資質を高めていき、しいては園全体の保育の質の向上につながることを期待している。

また、本園は研究実践園として幼児教育に関する研究に取り組み、区内の幼稚園・認定こども園・保育所・小学校等に研究発信をする役割等を担っている。質の高い幼児教育の発信のためには、日常から園の目指す教育方針と園運営の実際、研究の内容と日々の保育を関連付けて教育実践していくことが必要である。実際の保育に、園が目指す教育と研究が反映され、そのことが幼児の育ちにつながらなければ、保育の質向上を図ることはできないと考える。

また、本園は公立幼稚園であり、教育公務員である保育者は教育公務員特例法第21条（研修）にあるように、絶えず研究と修養に努めなければならない。研修を通して身に付けた知識と技術を基に自園の教育活動を創造的に作り出し、その成果を公表することが求められている。

特に今年度は、9月27日に教育研究大会で公開保育および研究発表をすることから、園長の提案で、保育の質向上のために研究者に研究アドバイザーを依頼した。園内での協働と園外の保育に関する専門家である研究者との協働で、より一層保育の質向上が望めると考えた。

2 研究者との協働

(1) 6月3日の保育参観・研究協議

園長及び研究部長から、研究の取り組みについて説明を受けた。その上で保育を参観し、保育者の援助や環境の構成について保育中に撮影した動画を示して問いかけた。

① 3歳児の「鉄棒にぶらさがりたい」

場面① 年長児が取り組んでいた高い鉄棒に挑戦しようとするが、手が届かない



写真1

場面② 保育者がすぐさま抱えて鉄棒にぶら下がるように援助する



写真2

場面③ すぐに鉄棒から落ち鉄棒に取り組むことをやめる



写真3

研究者からは、まだ自分の力では高い鉄棒にぶら下がる事が出来ない3歳児を、保育者が援助して高い鉄棒にぶら下がるようにしたが、すぐに落ちてしまいその後鉄棒に取り組むことをやめてしまった。保育者の援助の意図は何か、また他の保育方法はなかったか問いかけた。

保育者からは、幼稚園とは違う高い鉄棒にぶら下がりたいたいという子どもの思いを受け止め援助した。鉄棒の高さを体感してほしいという保育者の願いと、自分の力でぶら下がりたいたいという子どもの思いにずれがあったことを、この動画を見て理解した。

保育者と研究者との協議では、子どもの発達を理解や子どもの思いを理解した上で援助することの必要性、それが研究主題でもある「幼児期にふさわしい生活の在り方」につながることを確認した。

② 4歳児クラスの「ちょうちょうになって遊ぶ」

場面① ちょうちょの羽を背中に付けようとして紐が取れてしまう



写真4

場面② 自分で紐をセロハンテープでとめて直す



写真5

場面③ 自分で直したことを保育者に見せると、保育者が再度テープを貼る



写真6

研究者からは、女兒が自分で羽の紐を付け直したことを認めてもらいたいという思いで保育者の所に行ったのではないかと捉えたが、保育者はこの子どもの思いをどのように受け止め再度テープを貼ったのか問いかけた。

保育者からは、取れやすいつくりであることが気になっていて、羽の紐をしっかりととめることで、友達と楽しく継続して遊べると考えテープを貼った。他の子どもへの対応もあり、本児が自分でとめたことを認めて欲しいという気持ちでいることには気付けずいたとの振り返りであった。

保育者と研究者との協議では、「主体的に学びながら自分のやりたいことを実現する子どもを目指す」という研究の視点から考えると、自分の力で羽の紐を付け直したことを認める保育者のかかわり、再度紐が取れた場合には、どのように付けると良いか考える経験が必要であることを確認した。

③ 5歳児の「スポットライト作り」

場面① 保育者のリードの下、遊びを始める



写真7

場面② 懐中電灯に興味をもち、色々な所に当ててみる



写真8

場面③ 懐中電灯を取り合う



写真9

研究者からは、この遊びが始まるきっかけと保育者はこの遊びを通して何を育てたいと考えたのか問いかけた。

保育者からは、「工作遊び」の本を見て興味をもったスポットライトを作ろうという子どもの思いを大切に、友達と考えを出し合い協力しながら作ってほしいと願い援助した。用具として準備した懐中電灯に子ども達の興味・関心が集中し、取り合いが始まった。どこが一番気持ちはいくのかあらかじめ予想しておくことが必要であったとの振り返りであった。

保育者と研究者との協議では、スポットライト作りという題材を取り上げたことで、子ども達は興味・関心をもって取り組んだ。懐中電灯に興味を示す子どもが多かったので、順番に使う、もしくは懐中電灯の数を増やすなど、それぞれの子どもの不思議さや面白さを体験できるように配慮する必要があったことを確認した。

(2) 8月23日の保育参観・研究協議

保育を参観し、園長と研究者、研究部長・副部長と研究者とで協議した。園長との協議では、6月3日の保育参観では園の教育方針・研究テーマと実際の保育との結びつきが弱いようが浮き彫りとなった。研究者から各学年の保育について問題提起があり協議したことで、保育者一人一人が自分の保育を客観的に見て振り返り、その後保育実践について深く考えるようになったとの報告を受けた。教育方針・研究テーマを保育で具現化することは今までも園長として保育者に伝えてきた。また、保育を計画し実践して評価し改善するというPDCAサイクルで保育実践してきた。しかしそれだけでは改善されなかったところを研究者から保育理論に基づいた指摘をされたことで、保育者一人一人が改めて自分の保育を客観的に見直し改善しようという意識をもち、園全体で保育の質向上を目指そうという意識の醸成につながったとの報告を受ける。

① 3歳児の「夏休みの体験を再現」

場面① 夏休みに体験した魚釣りを再現して遊ぶ



写真10

場面② 自分の作ったオレンジジュースをみんなが順番に飲み、戸惑う



写真11

場面③ ジュースを飲んだ子ども達とままごとをする



写真12

夏休みに体験したキャンプ、魚釣りなどを再現して遊ぶことが出来るように環境を準備した。遊びをイメージしやすい環境の構成と、担任がいることに惹きつけられ、子ども達が集まってきた。保育者は子ども達の遊びを見守りながら、遊びが楽しめるような言葉がけを行った。

男児が保育室で水筒にオレンジのお花紙を入れてオレンジジュースを作ってきた。保育者に飲んで欲しくて渡すと、美味しそうに飲んでくれたことに満足気であった。その後、そばにいた女兒が保育者からジュースを取り飲む真似をし、周りにいた女兒達も飲む真似をした。不安げな表情で見ていた男児であるが、ジュースが戻ってくると再度保育者にジュースを飲んでもらった。

夏休みの経験を活かせる環境の構成をすることにより、子ども達の主体的な遊びとなった。また、保育者の所に子ども達が集まり、甘えたり、かかわりを楽しんだり、自分の遊びを認めてもらったりしていたことで、情緒が安定した。3歳児にふさわしい生活の在り方であったと捉える。さらに、保育者と子どもとのかかわりを子ども同士のかかわりへとつなげる橋渡しをしていた。研究テーマである「豊かな人とのかかわりの中で自分の思い、やりたいことを実現させる幼児」を実践していた。

6月3日の研究協議以降、保育者自身が自分のかかわりが子どもの遊びに及ぼす影響を考えて援助するようになった。3歳児にの発達について理解を深め一人一人の子どもの理解したうえで教師の願いをすり合わせるなど、ふさわしい生活の在り方を実践していた。

② 4歳児の「夏休みの体験を再現」

場面① 夏休みに体験した盆踊りの太鼓を作りあげ、叩き始める



写真13

場面② お祭りごっこをしていた女児達が太鼓を作り始める



写真14

場面③ 太鼓仲間が増え、保育者の子ども盆踊りの歌に合わせて太鼓を叩くことを楽しむ



写真15

夏休みに体験した夏祭りを遊びとして再現できるように、出店を作りそれぞれのお店の品物を作りながらお客さんとやりとりをする遊びを楽しんでいた。自分が体験したことを伝え合い、出店の品物を決めたり、値段を決めたりしていた。

そのうち、一人の女児が「先生、盆踊りの太鼓作りたい」と保育者に伝えると、保育者が段ボール、新聞紙、ガムテープを準備した。女児は段ボールを組み立て、保育者から新聞紙を丸めて中に入れると良いというアドバイスを受け実行し、最後に箱を綴じてガムテープでとめて太鼓を完成させた。その後、廃材コーナーからラップの芯を探し出し、太鼓を叩き始めた。その遊びを見ていた女児達が、次々と太鼓を作り始めた。最初に作った女児が作り方を教え、難しい所は互いに助け合いながら、8人の女児が太鼓を作り完成させた。出来た子どもから、保育者の「子ども盆踊り」の歌に合わせて太鼓を叩くことを楽しんだ。

保育者は、太鼓を作りたい女児の思いに耳を傾け、実現できるように材料・用具を準備し、作り方のアドバイスをしていた。子どもの思いを聞き、実現に向けて援助していた。そのことで、一人の女児の遊びが多くの子ども達の遊びへと広がった。太鼓を作る過程で試行錯誤が見られたが、難しいことやうまくいかないことを乗り越えながら完成させた。出来上がった太鼓を仲間と一緒に叩くことで、充実感・満足感を得たようで、このことが次への活動の意欲につながると考える。

6月3日の研究協議以降、保育者が先回りをして配慮するのではなく、自分なりに考えたり工夫したりして試行錯誤しながら目的に向かって取り組んでいけるように援助しているとのことである。子ども達は、研究テーマである豊かな人とかかわりの中で自分の思い、やりたい

ことを実現させるために、主体的に学んでいた。

③ 5歳児の「ケーキ作りからケーキ屋さんへ」

場面① 登園後すぐに「記念日のケーキを作り食べてもらおう」と話し合い決める



写真16

場面② リンゴを切るのが難しく、やり方を互いに伝え合いながら切る



写真17

場面③ 様々な素材を使ってケーキをデコレーションする



写真18

場面④ ケーキ作りに1時間30分取り組み、食べてもらうところまでいかないかもしれないことを保育者に気付かされ、話し合う



写真19

場面⑤ 誕生日の保育者に「おめでとう」と言ってからケーキを食べてもらい満足げな様子



写真20

女児5名が、「記念日のケーキ屋さん」という共通のイメージで、登園直後から遊び始めた。園庭に落ちていたリンゴを拾って切ったり、すりおろしたりしてケーキに飾り付けた。収穫し忘れた大きなラディッシュを見つけてすりおろし、赤いクリームにした。種をさやから取り出し、ケーキの上に飾った。様々な自然物をケーキの飾りつけにしていくことが楽しく、ケーキ作りに夢中になった。1時間30分経過したところで、保育者が「そろそろ片付けだけれどどうする?」と、5人の女児にこの遊びをどうするか考えさせるようにしたことで、当初の目的通りケーキを誕生日の先生に食べてもらうことにしようとした。先生を呼んできて喜んで食べてくれたことで、みんなの共通の目的を達成し、満足感を得ることができた。

年長児は、周囲の自然物を積極的に取り入れ、見通しをもって粘り強くケーキ作りに取り組む、「主体的な学び」をしていた。ケーキ作りの仲間と、互いの思いや考えを伝え合ったり、

考えを出し合ったり、協力したりして「対話的な学び」をしていた。直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせてケーキ作りと向き合い試行錯誤を繰り返し、「深い学び」を実現していた。

6月3日の研究協議以降、子ども自身が興味・関心を持ったものや題材とじっくりかかわることができるようにしてきたとのことであった。友達関係が深まり、自分の考えを伝え相手の考えも聞くという関係性となり、試行錯誤しながらさらに遊びを充実させるという主体的・対話的で深い学びがなされていた。

Ⅳ まとめ

6月3日と8月23日では、どの保育者の保育も明らかに違った。3歳児は夏休み明けの気持の安定を図る保育者のかかわりと夏休みの体験を再現できる環境の構成、4歳児は保育者が子どもの思いに耳を傾け体験に基づく遊びを再現できるように援助、5歳児は子どもが遊びに没頭できる時間の保障と仲間との協同が実現できる遊びの展開がされていた。いずれも、研究者との協議を通して自分の保育の課題として明確になったことを意識し、園の教育方針や研究テーマを保育実践するとしたらという視点に立ち保育実践がなされていた。そのことで、子どもたちはそれぞれの年齢や発達に応じた幼児期にふさわしい生活が保障され、保育者や友達など豊かな人のかかわりの中で自分の思いややりたいことを実現していた。

研究対象園は、園長のリーダーシップ及び園の職員それぞれが得意な分野に責任をもち力を発揮する分散型リーダーシップを取り入れるなど、保育の質向上に向けて自助努力している園であった。

いずれの保育者も、保育経験年数が10年以上あり、複雑で多様で刻一刻と変化していく保育という行為をこなしていくことはできていた。しかし、保育経験が豊富なことから今までかかわってきた子どもの姿から想定して目の前の子どもの理解が不十分であった。また、近年園に求められる機能が増大し、多忙感から保育を省察及び構想する時間が減少したことによる教育方針と研究と実際の保育の結びつきが弱かった。

研究者が撮影した保育の場面の動画を見ながら、保育の意図を尋ねられたり問題提起されたりすることで自分の保育を客観的に振り返ることができた。また、外部の保育に関する専門家である研究者に保育を公開するということで、緊張感をもって日々の保育に取り組むようになった。さらに、保育についての協議では、園の教育方針や研究テーマを基に保育実践するとどのような保育内容を選び、どのように子どもにかかわるのか、具体的に協議した。その際、研究者に一方的に指摘されるのではなく、保育者と研究者で協議することを通してより良い保育内容、保育方法を共に導き出した。

保育者が自らの保育を改善しようという意識をもち、園長をはじめ全保育者で園内研究や事例を検討することを通して具体的な保育内容・保育方法を見出し、次の実践に活かすという保

育の質向上のサイクルができた。

保育の質向上には、幼児教育・保育施設によるリーダーシップはもちろんのことであるが、保育の現状を理解した研究者が積極的に保育現場にかかわり、保育者と共に協働することで、より効果的に保育の質向上が望めることが、本研究から分かった。

V 引用文献

- 1) 厚生労働省 (2017). 保育分野の現状と取組について
- 2) ベネッセ教育総合研究所の調査 (2019). 第3回幼児教育・保育についての基本調査
- 3) 大宮勇雄 (2006). 保育の質を高める—21世紀の保育観・保育条件・専門性. ひとなる書房
- 4) 小林育子, 民秋言他 (2012). 園長の責務と専門性の研究. 萌文書林.
- 5) イラム・イジーム, エレーヌ・ハレット著, 秋田喜代美監訳・解説 (2017). 明石書店
- 6) 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (2019). 平成30年度「幼児教育の推進体制構築事業の成果に係る調査分析」

